

## ■ ショスタコーヴィチ / 交響曲第 10 番 木短調 Op.93

ソ連の体制下で生きたデミートリ・ショスタコーヴィチ（1906-1975）は、常に「社会主義リアリズム」との関係で作品が論評され、ときに共産党から手ひどく糾弾された。交響曲第 10 番も初演当初から激しい論争に巻き込まれた一曲である。ちょうどスターリンが 3 月に亡くなり、夏から秋にかけての短い期間に書き上げられたことから、スターリンの死と関わっているのではないかと推測されたが、1950 年から翌年にかけて、この交響曲の断片を作曲家が聴かせてくれたというタチアナ・ニコライエワの証言もあって、事情は単純ではない。50 分ほどの全曲は暗い悲劇的な様相を帯びていて、人生を肯定する、いわゆる「社会主義リアリズム」の精神とは相反するといった批判、また、楽章のバランスに問題があって、とくに終楽章が弱いという音楽的な批判を浴びてきた交響曲だが、謎めいた音名象徴も全体のドラマティックな構成も魅力的である。第 1 楽章モデラートはゆったりとした 3 拍子で展開される長大なソナタ形式。第 2 楽章アレグロは荒々しく、緊迫感のある自由な形式のスケルツォ。第 3 楽章アレグレットは自分を表す音名モチーフ、DSCH を用いながら展開される舞曲風の楽章。ホルンの楽想が明るさをもたらしつつ、明暗の間を揺れ動く。第 4 楽章はアンダンテの暗い序奏で始まる。悲しい歌は弦楽器から木管楽器に受け継がれたのち、アレグロの主部に到達する。喜びに溢れた明るい雰囲気満ちているものの、再び DSCH のモチーフが導入され、途中のグロテスクなマーチも謎めいている。最後は華麗な走句で終わる。

白石 美雪

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。

### 楽器編成

ピッコロ、フルート 2（ピッコロ持ち替え 1）、オーボエ 3（イングリッシュ・ホルン持ち替え 1）、クラリネット 3、ファゴット 3（コントラファゴット持ち替え 1）、ホルン 4、トランペット 3、トロンボーン 3、チューバ、ティンパニ、スネアドラム、バスドラム、トライアングル、シンバル、シロフォン、タムタム、弦五部

※スコア上の表記